



## 雪子と墨子

春潮漁史

昔むかし或ある處ところに二人の娘むすめが居ゐりました。姉あねを雪子ゆきこといい云いつて、妹いもうとを墨子すみこと申まうしましたが名前なまえの通り姉あねの雪子ゆきこは天性ちやうせうに美誠みじやうに美麗びれいで心こころも至いたつて優やさしう御座ございました。妹いもうとの墨子すみこは顔かほは醜みにく、心こころも屈かがつて居ゐりました。

其その上へ墨子すみこは毎日まいにち御馳走ごちそうを食たべたり美うつくしい衣服きものを着きたりして面白おもしろく遊あそんでばかり居ゐりましたが、雪子ゆきこは年中ねんぢゆう不淨よそぢた着物ぎものを着きて朝あさから晩ばんまで御臺所おだいどころで下女げぢよの様ように働はたらいて少すこし暇ひまな時ときには御臺所おだいどころの隅すみで糸いとを績つひいで一寸いちゆつとの遊あそぶ暇ひまさへなく働はたらきまして誠まことに孝行こうぎやうな娘むすめでありました。

今日も朝から御臺所の事をしてしまつて少し手があきましたから常の通り糸を續ぎ初めました。余り一生懸命に續いたので手から血が出て糸巻を眞赤に染めましたので、之れを洗ふと思つて井戸端へ來ましたが折り悪しく小石につまづいて糸巻を井戸の底へ落してしまいました。所が其糸巻は墨子のですから驚いて墨子の處に行きまして、今の出來事を残らず話して罪を恕して下さいとあやまりました。「御免なさいよ、其代りに私のを上げるから」と云ふと墨子は大層腹を立て、聲も荒々しく「糸巻を落したのなら早く拾つて來て下さいよ、姉さんあやまつたからつて、糸巻は歸つて來ませんと無理な事を云ひました。そこで雪子は困りさつて井戸端へ歸つて來ましたが、女の身で之の恐しい眞暗な深い井戸へは如何にしてもはいれませぬ種々と考へましたが、他によい手段もありませんので、ふるえながら井戸へ

はいりましたが次第に呼吸が塞る様な心持ちがしてとうとう氣が遠くなつてしまいました。

四十二

雪子が正氣付いた時には美しい花が一面に吹き亂れて居る野原の眞中に立つて居りました。余り面白い景色なので蝶々などを追ながら進んで行きますと大きな林檎の木が眞赤に熟して枝も折れるばかりに實を付け居りました。雪子の通るのを見て「モシ雪子さん私達に二三日も前から熟しきつて居るのですから此の木を振つて落して下さい」とたのみますので力がある限り木を振つて林檎を皆んな落してやりまして又歩き初めました。すると行く手に小さな見苦しい家が一軒立つて居りましたのでそこへ進んで行きますと家の内から白い牙を持つて居る見るから恐しいお婆さんが顔を出して見て居ましたので雪子は驚いて逃げ様としますと、お婆さんはそれを止めて、

「そんなに恐はがらないでよい、お前が骨身を惜まず一年間姜しの處で働けば、糸巻を返して上げ

るし又お前が持てる丈けの金貨を與げ様」  
と云はれましたので雪子は之のお婆様の所で一年間働くことになりました。

翌朝から雪子は早く起き御臺所の事から御座敷から廣お庭まで清らかに掃除して、お婆様が用を命じますと嬉んで早く用をたしますので大層調方がられて、種々の御馳走や、美麗な衣服を呉れましたので家に居るよりか餘程幸福な日を送つて居りました。

月日の過ぎるのは早いもので最早や雪子が來てから一年になりましたので、或時お婆さんは雪子を部屋に呼んで、

「お前は一年間よく神妙に働いて呉れましたから約束通り糸巻を返して上げます、又之れはお前が勉強であつた報酬です」

と云ひながら金貨で満ちて居る大きな囊を呉れました、その上に美事な帽子や衣服や靴を與へられましたので喜び勇んで家へ歸つて參りました。

家中の人達は居なくなつた雪子が立派なお姫様になつて歸へつて來ましたので大變に驚いて立派になつた雪子を取り圍つて何をした事だと尋ねました。そこで、雪子は今迄あつた事を一つ残さず話して聞かせて墨子に糸巻を返しました。此話を聞いた墨子は急に羨ましくなつて「それぢや、私も行つて來ようや」と自分で自分の糸巻を井戸の中へ投げ入れてそして自分で井戸の中へ入つて行きました。

やがて墨子が目を開きますと姉に聞た通りの花野原に出ましたからやたらに花を折つたりむしつたりして行きますと、前に林檎の木が眞紅に熟して居る實を枝が折れる様につけて居ましたが、今墨子の通るのを見て、

「若し墨子さん木を振つて下さい私達はもう此間からもう熟しきつて居るのですから」

とたのみました。墨子は頸を横に振つて「私しにそんな骨の折れるが事が出来るものです」

か

と頭をそむけて行き過ぎてしまわれました、そをこ  
をして居る内に漸く姉に聞たお婆さんの住家まで  
来ました。時にお婆さんは前と同様に窓から顔を  
出して居ましたから墨子は之れが姉様に聞たお婆  
様だと気がついて其の前に進み寄つて少しも恐れ  
ずに當分妾しを使ふて下さいと請ふて之の家へ住  
みこみました。

翌日は勞かれて居るにもかゝらず太陽の出ない  
中から起きて一生懸命で働きました。此れは自分  
も姉様と同じ様に澤山の金貨を得ようと思ふので  
いや／＼ながら務めたのでした、然しそれも永く  
は續かず二日目にはそろ／＼惰け出しまして三日  
目には太陽が窓を照しても起き様とせずお婆に  
起されて無性々々に起きました、四日五日と日を  
経る度に本性を表して來ましたからお婆様もあさ  
れて七日目には暇をやると云ひ出しました。然し  
墨子は大變嬉んで姉様と同じ様に金貨や衣服がも

らへると思つて居りました、所がお婆様は大きな  
コルタの箱を持つて來て墨子の頭から浴せかけ  
まして、

「之れがお前が七日働た報酬です」

と云ふて消えてしまいました。そこで墨子は泣く  
泣く家へ歸つて來ましたが、たゞでさい黒い墨子  
はコルタの爲めに印度の黒奴の様になつてしま  
いましたので近所の村人に誰れ一人墨子をお嫁に  
と云ふ者がありませんでしたが、姉の雪子の方は  
村の中に大評判となりまして方々からお嫁に下さ  
いと云ふ人が澤山ある様になりました。

## 金魚のお話

會員 よ し 子

ある處に太郎と云ふ可愛らしいすなはな子供があ  
りました。毎日幼稚園に通つて居りましたが大變